
迷路

靈刀村雨丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷路

【Nコード】

N3475P

【作者名】

霊刀村雨丸

【あらすじ】

幻想郷の崩壊。それを救ったのは、一匹の優しい妖怪でした。

それは、彼女が愛した妖怪。その死を目の当たりにした彼女は・・・

注意・・・キャラ崩壊が起きつつあるので気をつけてください。またウケ狙いは一切ございませんのでお気をつけを。

(前書き)

テスト明け一発目の小説ですがまあ読んでください。

元ネタ動画は後書きで紹介するので今は本編を。

幻想郷の崩壊……

それを救ったのは

一匹の心優しい、妖怪でした……

博麗神社の中、和室には一枚の写真が飾られている。つといても、一枚の写真を額に入れて棚の上に置いてあるだけだ。

それを見つめている者がいる。博麗霊夢だ。しかし、その表情は曇っている。そう、悲しみに埋もれた表情だ。霊夢は写真から目をそらし隣の物に目を向ける。そこにあるのはあちこちに穴があり、しかし原型を留めている帽子だ。色は分かりにくいが薄いピンク色で、前に紅い細い紐でリボンが作られている。

霊夢はそれを見つめ、目を細めながら手に取り、目を伏せてそっと抱きかかえる。

日本のどこかにあると言われている忘れ去られた場所、「幻想郷」

今日も雲ひとつ無い青空が広がっている。その幻想郷にある、「人間界」と「幻想郷」の分かれ目に立つ神が博麗神社である。周りは緑に囲まれ、いかにも神社と言う雰囲気である。

その神社の巫女が博麗霊夢である。博麗霊夢は本人その気は無いのだが何故か周りの妖怪に好かれていた。しかも強い妖怪にまで好かれている。その訳もあって、この博麗神社には時々妖怪がやって来るのだ。

そんな中、しばしば博麗神社にやって来る妖怪がいた。最強にして長寿の隙間妖怪、八雲紫だ。彼女は結構霊夢の事を慕っているらしく、煎餅やらお餅やらを盗みにやって来る妖怪で、胡散臭い。

「紫！また私のお煎餅盗んだでしょ！」

「うふふ、別に良いじゃない。煎餅は美味しいのよ？」

と、自分の持つ扇子を広げ、口元に当てて言う。

「はあ。何度言ってもこの妖怪は言うことを聞いてくれないわね。もう知らないんだから。」

と言って、背を向けて別の場所を掃除しに何処かへ行く。紫はそんな姿をちょっと悲しそうな目で見ていた。

事件は唐突に起こった。

「うわっ！」

夜中、狂気の満月が真上に満ちる頃、唐突な地震に襲われて霊夢は飛び起きた。否、飛び起こされた。

「一体なんなのよ！またあいつが^{天子}緋想の剣でも刺しているの！？」

そういつてやや薄い胸にさらしを巻き、巫女服に着替えて外に飛び出す。そこで目にしたには、

「嘘……」

空が、割れていた。

今、空に幾千もの亀裂が入り、呼応するかの様に地面に出来た亀裂から紅い光が漏れている。恐らく、いくら比那名居の娘だからと言って、ここまでの芸当は出来ないし、まずしないだろう。そして、見れば見るほど何が起きているのか博麗霊夢には分かってしまう。

「まさか……人間界からの高負荷による軋みに幻想郷が耐え切れなくなっているの!？」

博麗神社にある書物で、確か人間界と幻想郷は表裏一体、向こうに大事件があれば、少なからずこちらにも影響するだろうと書いてあった。

7

今、人間界に何が起きているかは知らない。しかし、今、幻想郷の崩壊の危機だ。自分の決めた居場所を、破壊するわけには行かない。決意した霊夢は、

「『軋み』が出来たら戻すまでよ！」

と言って、懐から一枚の札を出す。幻想郷と人間界を分ける結界、博麗神社大結界の修復用の結界だ。この札は博麗神社大結界における『軋み』や『歪み』を取り除く結界札だ。幻想郷も一つの結界と考えるならこれが有効だと思ったのだ。

霊夢は札から結界を空中展開し、周りにある『軋み』を取り除いていく。相手は思ったよりも強く、吸収している札が暴れている。霊夢は歯を食いしばり、必死に押さえつける。しかし、限界だった。

「ッ！」

結界に亀裂が入り、衝撃で手から御祓い棒が吹き飛んだ。結界が砕けた反動で、目の前に亀裂が生まれている。その亀裂は大きくなり、ありとあらゆる物を吸い込み、大きくなっていく。もう少しで自分を取り込まれそうになる。しかし、霊夢は動けない。目の前の恐怖に目を見開き、尻餅について固まっている。

8

その時、頭を軽く叩かれた。そして霊夢を追い越し、亀裂に向っていく妖怪がいた。

「……………ッ！」

霊夢は目を開き前を見る。その後姿は紛れも無い、八雲紫そのものだ。

紫は振り返らず真っ直ぐ前を進む。霊夢は立つことが出来ない。

霊夢は見た。結界に入る刹那、紫がこちらに顔と肩だけで振り向き、にっこりと笑ったのを。そして再び前を向き、

霊夢は目を見開く。

瞬く間に碎け散っていった。

霊夢は紫が跡形も無く消え、しかし自分の力を使って幻想郷を救ったのを見た。

霊夢の目から涙が落ちた。それをきっかけに、霊夢は大泣きした。傍らには紫の被っていたボロボロの帽子が一つ。

紫の死から三日、帽子を抱いた日の夜。霊夢は自分の寝巻きに着替え、掛布団を足にかけ、敷布団に座っていた。

霊夢は掛布団を引っ張り胸の前で思いつき握り締める。しかし、何も変わるはずは無い。

ふと前を見た。そこには八雲紫の姿。手を伸ばしている。

霊夢は顔を明るくし、手を伸ばした。そしてその紫の手を握ろうとした。そして、握る前に紫は消えてしまった。幻覚だ。

霊夢の目には再び涙が溜まる。

そして、霊夢は顔を押しさえて再び泣き出した。

満月が落ち、日が昇る。霊夢は境内の賽銭箱の近くを掃除していた。しかし、手つきはほぼ機械的。もう何も考えたくない。霊夢はそんな事を思っていた。そんな中、

「おーい！霊夢ー！」

と聞きなれた声を聞いた。うざい、と思いつつ仏頂面で振り返る。そこにいるのは勿論箒を持った霧雨魔理沙。

「いや悪いな！この前勝手に煎餅持ち出しちまってよ！」

と頭の後ろに片手を当てて謝罪する。

何だそんなことか、どうでもいい、と霊夢は思う。早く一人になりたいと思ったので、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何も言わず振り返り、会話を拒絶する。

魔理沙は相手の意図を理解し、しかし最低限の礼儀を持って、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

帽子を深く被り、哀悼の意を表した。そして、魔理沙は音を立てず飛び去っていった。

午後、久しぶりに倉の中を掃除しようと思い、博麗神社の裏にある倉を開けてみた。中は埃だらけであることから長い間使掃除しなかったことが分かる。霊夢ははたきをもって無表情で埃を落としていく。

一番高いところに埃が溜まっていたので背伸びをし、はたきで埃を落とそうとする。しかし、上は不安定だったらしく、埃と一緒に物まで落ちてきた。

「ぎゃっ!」

霊夢は短く悲鳴を上げ、尻餅を着く。頭をさすりながら周りを見る。そして、ふと目に留まったものがある。

「?」

良く見ると文字が書いてあった。

「博麗禁書……………」

霊夢は興味があったので何気なく手にとって開けて見る。パラパラとページを捲っていると、いきなり目を見開く。口から漏れる言葉は、

「禁術、博麗夢幻回生……………回生には……………蘇らせるもの……………同程度の代償……………」

霊夢は齒を食いしばる。『同程度の代償』はどんな物か分かっているのだ。しばらくして、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その目に揺らぎは無い。決断したのだ。愛する人と引き換えに、愛する物を捨てることを。

その後、霊夢は一週間ぶつ続けて禁術を学んだ。禁術を行う為に他の札が必要となり、その札を作る為に霊力を費やしたり、できる限りの事は全てやった。後は成功させるだけだ。

星しか輝かない、新月の日。霊夢はかなり真面目な顔で境内に立っている。足元には青紫色の魔方陣。円が二つあり、大きい円と小さい円の間には無数の文字が、小さい円の中には星が描かれている。

霊夢は星の真ん中の五角形に立って両腕を突き出し御被い棒を持っている。後は霊力をつぎ込むだけだ。

霊夢は霊力をつぎ込む。その脳裏には、紫と霊夢が仲良くうつっている。そのことを齒に食いしばりながら黙々と霊力を入れる。そして

ビキシッ！バリッ！

幻想郷の崩壊が再び始まった。しかし霊夢は、

「おおおおああああっッ！……」

雄^{想郷}たけびを上げ、更に強く注ぎ込む。愛する人を取り戻す為に、世^幻界を敵にしたのだ。

同刻、魔理沙は幻想郷の崩壊を見た直後、雄たけびを聞いた。

「くそッ！あいつ……！」

魔理沙は箒に乗り、上空に舞い上がった後、全速力で向う。元凶、博麗霊夢へ。

同刻、アリスの家は騒がしかった。人形が人形をもってバツクに入

れる。

「全く、あの馬鹿無茶してくれるわ。」

そういい、最後の人形をバツクにいれ外に出て飛び立つ。こんなことをするのは一人しかいない。あの博麗の巫女だ。

同刻、紅魔館。ロビーで紅茶を飲んでいるレミリアに咲夜がやって来た。

「お嬢様、」

「分かっているわ咲夜。行きなさい。」

「そのつもりです。現実を見ない馬鹿を殴りに行ってまいります。」

そう言い、消えていった。レミリアは、不敵な笑みを浮かべている。まるで、運命が見えているのでもかのように。

幻想郷の空の中心から亀裂が幾千にも走っている。そんな中、霊夢が斜め上を見る。

「くッ!?!」

三つの影が飛来している。真っ直ぐとこちらに向ってだ。

その影は普通の魔法使い、霧雨魔理沙。七色の人形遣い、アリス・マーガトロイド。そして完全に瀟洒な従者、十六夜咲夜だ。その中、霧雨魔理沙が、

「やめろおおおおおおおッッ!?!」

雄たけびを上げながら突っ込んでくる。霊夢は一瞬焦り、苦い顔を

する。しかし、つぎ込みは止めない。

説得に応じないと判断したアリスが槍や剣を持った多数の人形を飛ばし霊夢に攻撃を仕掛ける。霊夢は一旦つぎ込み先を胸から取り出した手元の攻撃札に変更。衝撃波で人形を吹き飛ばす作業を連続で行う。

咲夜は懐中時計を手に持ち見下ろして時間計算。一瞬にして霊夢の周りに大量のナイフが出現。意思を持ったかのように霊夢に突き刺さろうとする。

霊夢は衝撃波の札を下にセットし、連続で射出することで全身に衝撃波をまとい、ナイフ共々弾き返す。しかし、禁術にかなりの量をつぎ込んだのか、霊夢の顔は必死だ。

魔理沙は手元にミニ八卦炉を手元に構える。一瞬、魔理沙は撃つことをためらう。自分の親友にこんな物騒なものを向けたく無いと。しかし、魔理沙は決心する。かつて、紫が言っていたことを思い出す。

「あいつは、幻想郷を一番愛していた妖怪だ………」

だから、

「私は、幻想郷を守る！たとえ、相手が相手であろうと！！」

そして、

「喰らえッ！マスタースパーク！」

ミニ八卦炉から出た膨大な量の魔力が霊夢を突き抜ける。

霊夢は、魔理沙がマスタースパークを放ってきたのを見た。顔が驚愕に満ち、

「嫌あああああああ！」

地面ごと捲れて霊夢は吹き飛んだ。幸いなのは衝撃波で威力が減衰し、神社崩壊までには至らなかったことか。

真っ白い空間の中、霊夢は体育座りをしていた。前は見ず、うつむいている。そこに、手が差し伸べられる。膝立ちの八雲紫だ。霊夢は八雲紫だと分かると構わず抱きつき、泣いた。紫は霊夢をそっと抱きしめ、泣き止むまで待つ。

泣き止んだところで紫は何かを呟いた。霊夢は涙が溜まった目で顔を上げる。そして、紫は何処かに消えてしまった。

今上半身が乗っかっているのは魔理沙の膝の上だ。そのことが分かれると霊夢は魔理沙に憤怒の疑問をぶつける。

「どうして止めるのよ！？あなたには分からないの！？大切な人を失った人の気持ちか！！」

魔理沙は何も答えない。

「黙ってないで！！答えなさいよ！！」

霊夢が更に疑問をぶつける。返ってきたのは、

「馬鹿野郎！」

ビシン！

ビンタだった。霊夢が驚く。魔理沙は話す。

「お前、この幻想郷を一番愛したのは誰だか知っているか……」

「……」

霊夢は黙ったままだ。構わず話を続ける。

「そつだ。八雲紫だ。お前は、八雲紫を復活させる為にこの幻想郷を破壊しようとした。そんな事をして、あいつが喜ぶとも思っていないのか！！」

「あの胡散臭い隙間妖怪はこの幻想郷を維持する為に、自らを犠牲

にしたのよ。あの妖怪に認められたあんたがその意思を継がなくて
どうするのよ?」

咲夜が霊夢に言う。アリスは静かに成り行きを見守る。

霊夢は今、初めて自分の間違いに気づいた。重大な間違いだ。間違
いの気づきは、

「う、あ、あああああああ!」

涙と変わり、魔理沙の足元で泣き崩れる。その涙は、自分の間違い
を、謝る為の涙だ。魔理沙は、霊夢の背中に手を置いた。その手に
は暖かさが伝わってくる。

幻想郷が戻っていく。終わったのだ。彼女の戦いが。

ある晴れた日、博麗霊夢は境内の階段を掃除していた。

「今日もいい天気ね」

そっぽやいて目の上辺りに手をかざして空を見上げる。その表情は、とても明るかった。

博麗神社の和室、あの帽子に手を取り、もって行く影がある。その影は……

(後書き)

こんにちは、 靈刀村雨丸でございます。

えー、今回は打って変わって真面目なお話でございます。皆さん読んでどう思いでしょうか？あ、紫信仰の方はゴメンナサイ。

今回は最近見た東方の動画にマジ泣きして小説にしてみることを決意しました。

まあ、書く時にまた動画を見直すわけですよ。そしておもむろに涙が込み上げて来るわけですよ。すると書けなくなる訳ですよ。そんな事を繰り返しながら頑張って書ききりました。

今回の小説の元ネタは「ようつべ」で「迷路 完成ver...」と打てばたぶん出ます。

日曜日にはちゃんとあっちのほうも出せたら出するので期待してください。

では皆さん、さようなら。また、何処かで...

え？何で敬語かって？特に意味はないよ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3475p/>

迷路

2010年12月6日23時19分発行